

宗教的心情としきたりの関連

研究開発室 小谷 みどり

—要旨—

- ① 家庭内祭祀の実態を把握するために20歳から84歳を対象に調査を実施したところ、老若男女問わず、墓参行為は浸透していたが、仏壇や神棚の保有率は若い層で低かった。神棚の保有率は2009年調査の37.0%から今回調査では29.8%と、大きく減少した。子どもの頃と現在の保有率も、神棚では大きな差があり、年々、保有率が減少している様子が見えてくる。
- ② 「あの世や来世はある、または存在すると思う」「生まれ変わりや輪廻転生はあると思う」「幽霊や亡霊、人のたたりはあると思う」などの霊魂観は若い人で強い。また全体の8割以上が「悪いことをすればバチがあたると思う」「虫の知らせはあると思う」と回答した。
- ③ 葬儀を「故人とお別れする儀式」と考える人は68.5%と、「故人の霊をとむらう儀式」と考える人を大きく上回っており、宗教的な要素よりも告別に儀式の意義を感じる人が多い。一方で、葬儀において慣習やしきたりを重んじる傾向は若い人に強い。
- ④ 慣習やしきたりを重んじるかどうかで、宗教色のある葬儀の是非が大きく異なっており、宗教色のある葬儀は、信仰や弔いとしてというよりは、慣習として捉えられ、存続しているといえよう。総論として、宗教的な心情や死者祭祀の観念は強いものの、葬儀のかたちにはこだわらない傾向がみとれた。

1. 調査の概要

戦後、核家族化や少子化で死者祭祀の担い手である「家」が変容したことに加え、生まれた土地で一生を終えるライフスタイルが主流でなくなったこと、地域共同体が変質したことなどから、葬送儀礼や祭祀財産としての墓のかたちが多様化している。

しかし一方で、「年に1、2回程度は墓参りをしている」「先祖や亡くなった肉親の霊をまつる」など慰霊的行動の実施率は高く（小谷 2007）、遺された人が大切な死者を追慕する行為は衰退していないといえる。また、初詣やお札・お守りを持つなど、多くの日本人は、特定の宗派の信仰とは別の次元で宗教的な行動をおこなっている（小谷 2013）。

そこで本稿では、家庭内での死者祭祀の実態や宗教的な観念について、過去の調査

との比較の視点を盛り込んで概観するとともに、葬儀と宗教についての関連の把握を試みることで、宗教的な観念の実態を考察してみたい。

調査の概要は次の通りである。

- <調査対象者> 20歳以上84歳以下の全国の男女765名(第一生命経済研究所生活調査モニターより抽出)
- <調査時期> 2012年9月13日～9月23日
- <調査方法> 郵送調査法
- <有効回収数> 713名(有効回収率93.2%)

(単位:人)

	20～39歳	40～54歳	55～69歳	70～84歳	性別合計
男性	68 (19.9%)	91 (26.6%)	92 (26.9%)	91 (26.6%)	342 (100.0%)
女性	86 (23.2%)	95 (25.6%)	102 (27.5%)	88 (23.7%)	371 (100.0%)
年齢層合計	154 (21.6%)	186 (26.1%)	194 (27.2%)	179 (25.1%)	713 (100.0%)

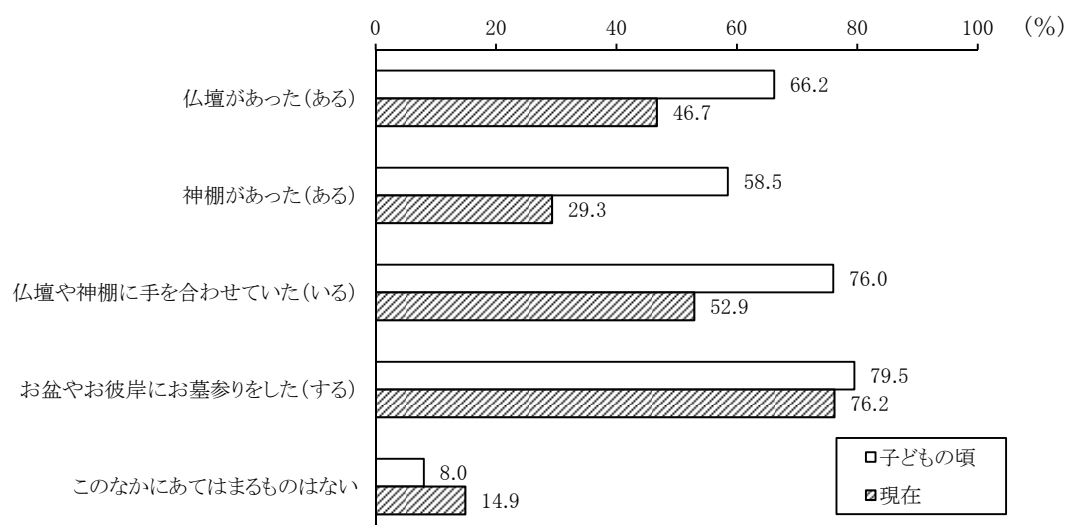
2. 宗教的行動

(1) 家庭内祭祀行動

家庭内における死者祭祀の実態を調査対象者の子ども時代と現在とで比較したところ、仏壇や神棚の所有率はどちらも減少していた。特に神棚は30ポイント近くと減少幅が大きい(図表1)。

2009年にも同様の調査をおこなっているが、調査対象者の年齢を前回調査と同一にして(35歳から79歳)再分析し、仏壇や神棚の現在の保有率を比較すると、仏壇(2009

図表1 家庭内での祭祀行動



年 46.9%→2012年 48.0%) はほとんど変化がないのに対し、神棚の保有率は 2009 年の 37.0%から今回調査では 29.8%と、大きく減少していた(図表省略)。一方、「お盆やお彼岸にお墓参りをする」人は、2009 年の 76.9%から今回調査の 76.7%と、ほとんど変わらない。

神棚の年齢層別保有率を過去の調査との比較でみると、35～49 歳では 28.4%→21.3%、50～64 歳では 34.7%→30.0%、65～79 歳では 48.0%→38.3%と、特に高齢者の保有率の減少が著しい(図表省略)。

今回調査の結果を年齢層で見たものが図表 2 である。「仏壇がある」と回答した人は 55 歳以上では過半数を占めるが、54 歳以下では 3 割程度にとどまり、大きな開きがある。「仏壇や神棚に手を合わせている」人も仏壇や神棚の保有率に連動し、若い層ほど回答率が低い。しかし、「お盆やお彼岸にお墓参りをする」人は 54 歳以下でも 7 割程度はいることから、若い層では、家庭内祭祀行為の実施は低調であるものの、墓参行為は浸透していることが分かる。

図表 2 家庭内での祭祀行動(年齢層別)

(単位:%)

	20～39歳	40～54歳	55～69歳	70～84歳
仏壇がある	29.9	30.6	52.6	71.5
神棚がある	19.5	25.3	32.0	39.1
仏壇や神棚に手を合わせている	39.6	44.1	55.7	70.4
お盆やお彼岸にお墓参りをする	70.1	69.4	80.9	83.2
このなかにあてはまるものはない	20.8	21.0	11.9	6.7

(2) 宗教的な心情

本調査では、宗教的な心情を測るため、霊魂に関すること、神仏に関すること、因果応報に関することなど 9 項目についてたずねた(図表 3)。

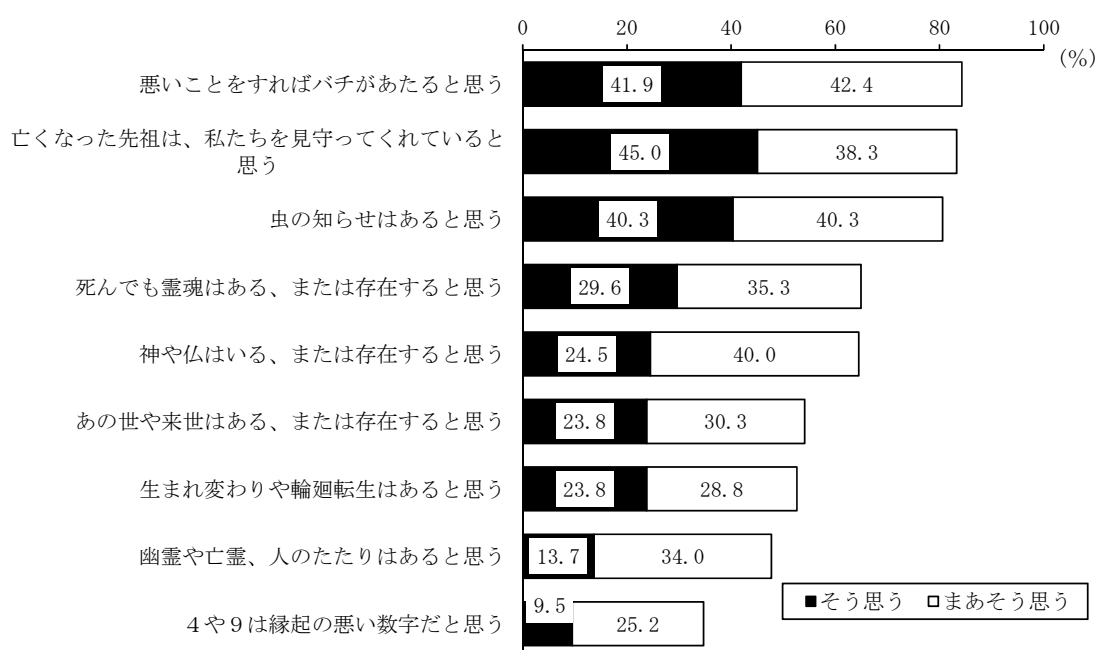
その結果、肯定的な意見が最も多かったのは「悪いことをすればバチがあたると思う」という意見で、84.3%が肯定しており(「そう思う」41.9%+「まあそう思う」42.4%)、「亡くなった先祖は、私たちを見守ってくれていると思う」という意見に肯定的な人 83.3% (「そう思う」45.0%+「まあそう思う」38.3%) とほぼ同率だった。「虫の知らせはあると思う」と回答した人も「そう思う」(40.3%)、「まあそう思う」(40.3%) を合わせると 80.6%と、8 割を超える人が肯定している。

また、「死んでも霊魂はある、または存在すると思う」という人は 64.9% (「そう思う」29.6%+「まあそう思う」35.3%) いる一方で、「幽霊や亡霊、人のたたりはあると思う」と考える人は 47.7% (「そう思う」13.7%+「まあそう思う」34.0%) にとどまり、15ポイント以上の差があった。霊魂の存在を信じる人は多い一方で、それと比較すると、幽霊や亡霊などマイナスの霊魂の存在については肯定しない人が多いものの、幽霊の存在を肯定する人はそれでも半数程度もいる。「あの世や来世はある、また

は存在すると思う」「生まれ変わりや輪廻転生はあると思う」と考える人もそれぞれ半数を超えており、肯定的な人と否定的な人が二分されている。

「4や9は縁起の悪い数字だと思う」とする人は、ほかの意見に比べると肯定的な人が少ないものの、34.7%（「そう思う」9.5%+「まあそう思う」25.2%）と、全体の3分の1もいる。4と9については、2002年8月に住民基本台帳ネットワークシステムが導入された際、住民票コードの数字をめぐり、「縁起が悪い」を理由に、番号変更の申請が全国で見受けられるという現象が起きたことが新聞でも大きく報じられた。

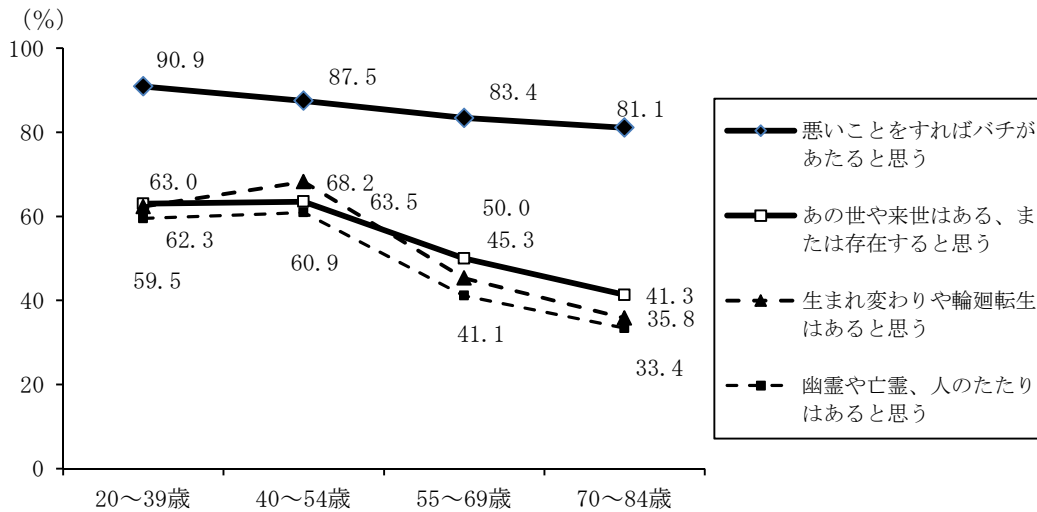
図表3 宗教的な心情



今回の調査結果を年齢層別にみると、年齢層による顕著な傾向がみられた項目は次ページの4つであった（図表4）。いずれも若い人で肯定的な傾向が強く、「あの世や来世はある、または存在すると思う」「生まれ変わりや輪廻転生はあると思う」「幽霊や亡霊、人のたたりはあると思う」においては、20～39歳と70～84歳とではそれぞれ20ポイント以上の大きな開きがあった。

他の項目は年齢層で顕著な特徴はなく、靈魂の存在、虫の知らせなどについても肯定する人はどの年齢層でも8割を超えていた。このことから、若い世代の方がたたり意識が強いことはすでに先行研究でも指摘されているが（後藤 1981、柳川 1985、小谷 2010など）、総合的に見れば、若者の方が強い宗教的な心情を持っているといえよう。金児（1997）は、1986年に大学新生に行なった調査結果から、若者の間には「オカゲ」と「タタリ」の意識が強いと指摘しているが、こうした傾向は25年以上経過してもみられることが確認された。

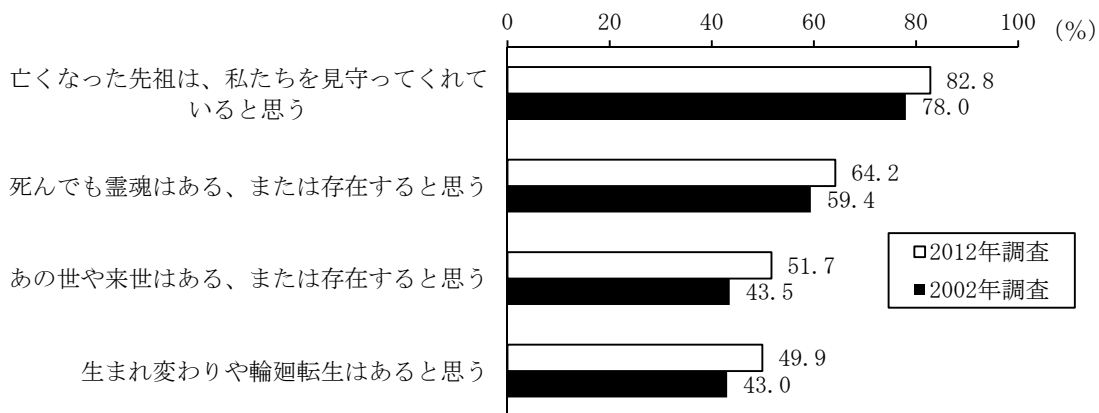
図表4 宗教的な心情(年齢層別)



次に、2002年に実施した調査と重複する項目について比較を試みる。2002年調査では40歳から84歳を対象にしていたため、今回の調査も40歳以上で再分析したところ、今回調査では、比較できる4項目すべてについて、肯定的な人が若干ながら2002年より多かった(図表5)。

この背景の一因には、断定するには乱暴であるが、東日本大震災が影響していると思われることができるかもしれない。例えば日本石材産業協会の調査では、「震災を機に、墓地・墓石に関する認識が変わった」と回答した人は東北地方で多く、「墓の持つ意義を再認識した」とする声が目立つ。東日本大震災が起きたのは、『葬式は要らない』(島田裕巳)がベストセラーになり、葬式不要論が噴出した時期であったが、震災犠牲者の遺族には、「葬式によって故人との心の折り合いがついた」という意見が多く、震災を機に、葬式に対する意識や慰霊の意味合いを再認識する人が増えたとの見解がある。

図表5 宗教的な心情(2002年調査との比較)



3. 葬儀に対する意識

(1) 葬儀とは

お葬式とはどんな儀式だと思うかをたずねたところ、最も多かったのは「故人とお別れする儀式」(68.5%)で、次いで多い「故人の霊をとむらう儀式」(24.6%)を大きく上回った(図表6)。

性別では特徴はないが、年齢層別では、70～84歳で「故人とお別れする儀式」と回答した人が他の年齢層より少なく、40～54歳と20ポイントの開きがあった。一方、「故人の霊をとむらう儀式」と回答した人が35.2%と、全体平均を10ポイントも上回った。

図表6 お葬式はどんな儀式か(性別、年齢層別) (単位:%)

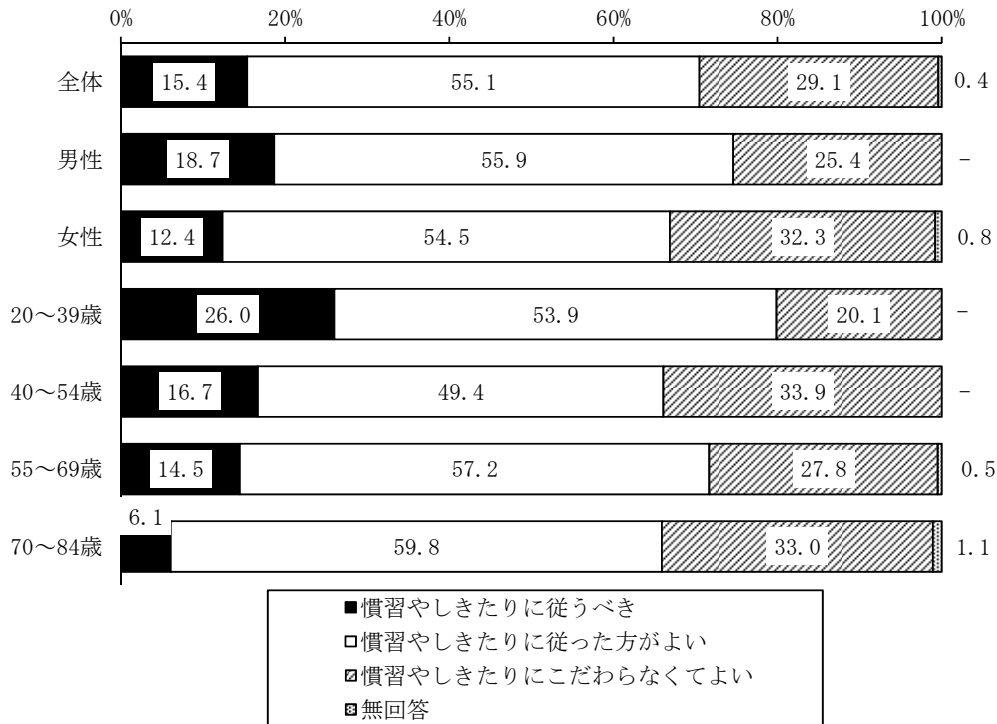
	全体	性別		年齢層別			
		男性	女性	20～39歳	40～54歳	55～69歳	70～84歳
故人の霊をとむらう儀式	24.6	26.0	23.2	25.3	<u>18.3</u>	20.1	35.2
故人とお別れする儀式	68.5	65.5	71.2	68.2	76.4	72.2	<u>56.4</u>
故人の死を世間に知らせる儀式	2.8	4.4	1.3	2.6	3.2	2.6	2.8
遺族をなぐさめる儀式	0.8	0.9	0.8	0.0	0.5	1.5	1.1
故人が世話になった人に、遺族が感謝する儀式	1.8	2.0	1.6	1.3	1.1	2.6	2.3
その他	1.1	1.2	1.1	2.6	0.5	0.5	1.1
無回答	0.4	0.0	0.8	0.0	0.0	0.5	1.1

注：全体平均より5ポイント以上高い項目を網かけ、全体平均より5ポイント以上低い項目に下線を付けた

次に、お葬式をする際には慣習やしきたりにどの程度従った方がよいと考えているのかをたずねたところ、「慣習やしきたりに従った方がよい」と回答した人が55.1%と過半数を占めた(図表7)。しかし、「慣習やしきたりにこだわらなくてよい」と考える人も29.1%おり、「従うべき」とする人(15.4%)を上回っていることから、慣習やしきたりに強いこだわりを持っている人はそれほど多くはないといえる。

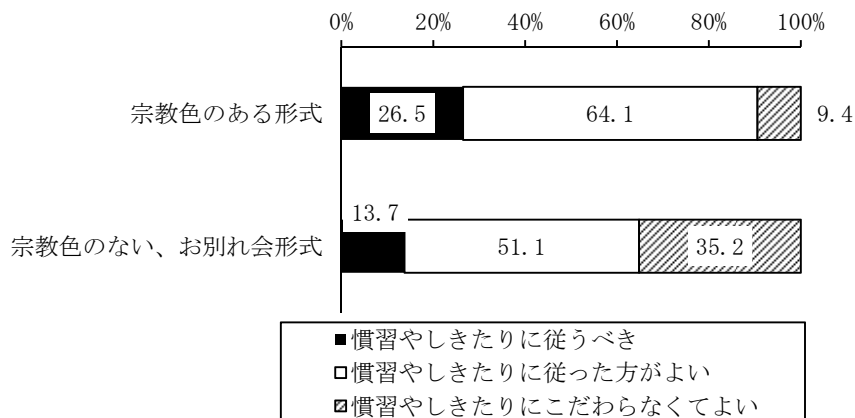
性別でみると、女性では「慣習やしきたりにこだわらなくてよい」と考える人は32.3%おり、男性より多い。また年齢層別では、「慣習やしきたりに従うべき」とする人は若い層ほど多く、20～39歳では26.0%と、「慣習やしきたりにこだわらなくてよい」とする人(20.1%)を上回った。一方、70～84歳では「慣習やしきたりに従うべき」とする人は6.1%にとどまり、20～39歳と約20ポイントの開きがあった。70～84歳では「慣習やしきたりにこだわらなくてよい」とする人が33.0%いることから、若い人の方が、慣習やしきたりを重んじる傾向があるといえる。

図表7 お葬式は、慣習やしきたりに従うべきか(全体、性別、年齢層別)



さらに自分のお葬式の希望について「宗教色のある形式」「宗教色のない、お別れ会形式」と回答した人が、慣習やしきたりをどう考えているかをみたのが図表8である。どちらの形式でも「慣習やしきたりに従った方がよい」が最も多いものの、「宗教色のない、お別れ会形式」を希望する人では、「慣習やしきたりにこだわらなくてよい」とする人が35.2%と少なくないのに対し、「宗教色のある形式」を希望する人で、「慣習やしきたりにこだわらなくてよい」と考える人はわずか9.4%しかいなかった。

図表8 お葬式における慣習やしきたりに対する考えと宗教色の関係



本稿ではページの都合上、図表を省略したが、宗教色のある形式を望む人は、必ずしもお葬式を故人の霊をとむらう儀式であると考えているわけではなく、むしろ故人とお別れする儀式というイメージを持っている人の方が多いことも、今回の調査結果から明らかになった。しかしその反面、宗教色のある形式を望む人は、友人や近所の人など、家族以外の参列を希望している人が多いこと、また、宗教色のある形式を望む人では慣習やしきたりにこだわる傾向が強いことから、宗教色のあるお葬式は、宗教そのものへの志向ではなく、慣習やしきたりに基づく形式であると捉えている人が多いと考えられる。

4. まとめ

多くの方は、墓参行為に代表される死者祭祀や、「先祖は見守ってくれている」といった意識を強く持っているが、それだけではなく、「悪いことをすればバチがあたる」「虫の知らせはある」などとも感じていることから、日本人は、特定の宗教や宗派とは別の次元で、宗教的な観念を持ち合わせているといえる。

一方、葬儀は「故人とお別れする儀式」であると考える人が多く、葬儀のかたちにはこだわらない傾向もみてとれたが、この背景には、宗教色のある形式が慣習やしきたりとして捉えられているという点が挙げられよう。死亡年齢の高齢化、少子化に加え、多死社会にあるわが国で、今後、葬儀がどのように変容していくのか、慣習やしきたりがどのように変容、あるいは消失していくのか、宗教的な観念との関連においても注目していきたい。

(研究開発室 主席研究員)

【参考文献】

- ・金児暁嗣，1987，「日本人の宗教行動と宗教意識」，三隅二不二監修『現代社会心理学』有斐閣：398-416.
- ・小谷みどり，2007，「日常生活における宗教的行動と意識」『Life Design Report』(2007.5-6)：4-15.
- ・小谷みどり，2010，「死者祭祀の実態」『Life Design Report』(Spring 2010.4)：28-35.
- ・小谷みどり，2013，「死にまつわる迷信や宗教的行為」『Life Design Report』(Autumn 2013.10)：4-15.
- ・後藤洋文，1981，「オカルトの意味するもの」，ジュリスト総合特集『現代人と宗教』有斐閣：117-122.
- ・柳川啓一，1985，「現代社会における宗教変容」，上田閑照・柳川啓一編『宗教学のすすめ』筑摩書房：142-162.